

川辺町民講師(将棋)

みなさんは御自身の得意とする技術や知識、経験を「どなたかに教えてさしあげる機会があればなあ。」と考えたことはありませんか？

今回の取材では、地域の方々の「学びたい」という意欲を応援しようと、町の『講師登録事業』を活用し、長年「将棋教室」の町民講師をされている小澤将博さん(81歳)に「将棋」の楽しさと「町民講師」のやりがいなどについてお話を聞きました。[令和7年7月29日取材]

(※)『講師登録制度』にご興味がある方は、「住民主体の生涯学習を支える講師登録制度」の記事も併せてお読みください。

先生はいつ頃から「将棋」を始めましたか？

私は小学三年生の頃に祖父から「将棋」を教わりました。ちょうど、『わくわく子ども教室（将棋教室）〔※1〕』に通ってくる子どもたちと同じくらいの年頃ですね。

今では藤井聡太さんに憧れて小さい頃からプロを目指す子もいますが、私の幼少期は時代的にプロを目指すという感じではなかったので、「雪合戦」や「魚釣り」と同じように大人たちに「縁台将棋〔※2〕」の相手をしてもらっていました。

〔※1〕小澤先生は、川辺町内の小学生を対象とした『わくわく子ども教室』と、みのかも定住自立圏の住民が相互参加可能な『学びのとびら』で、将棋教室の講師を務めています。

〔※2〕縁台将棋とは、夕涼みがてら縁台で楽しむ将棋のことです。

転じて「下手同士が指す将棋」という意味でも使われています。

先生は「将棋」が強くなるまでに、どのような努力をされてきましたか？

私は「将棋」を始めてすぐに周りの大人たちにも勝つようになったこともあって、ついて学べる大人がいなかったんです。だから、長らく「将棋」は“遊び”の1つでしたね。

本格的に「将棋」を学ぶようになったのは中学生になってからで、新聞に掲載された詰め将棋の問題に取り組みました。

あの頃の毎日新聞は、詰め将棋の問題の正解者の中から10名にタオルを景品として贈られる企画があり、私は隔週くらいでその景品をもらっていたんですよ。

そして社会人になってからは、昼休みに職場の同僚と将棋を指したり、日本将棋連盟の月刊誌「将棋世界」を読んだりしていましたね。

その後、将棋教室の講師を務めることになった経緯を教えてください。

大きな決断や大きなきっかけがあったのではなく、「将棋」を人に教えることは私にとって自然なことでした。

将棋六段〔※3〕を取った頃に、日本将棋連盟に指導員資格試験制度〔※4〕ができたことを知り、「じゃあ、資格を取ろうかな。」という感じでしたね。

〔※3〕将棋六段は、日本将棋連盟主催のアマチュア全国大会で優勝者に授与され、プロ棋士に次ぐレベルとされます。

〔※4〕日本将棋連盟の将棋普及指導員資格試験制度は、将棋の普及活動に熱意を持つ人材を育成することを目的とし、平成6年度（1994年度）から始まりました。

『学びのとびら』の各種講座には、みのかも定住自立圏の小学生以上が通うことができるとお聞きしています。『学びのとびら(将棋教室)』にはどのような方が通っているのでしょうか。

私が講師を務めている『学びのとびら(将棋教室)』には、川辺町、八百津町などの“みのかも定住自立圏”の枠を越えて、可児市や瑞浪市から通ってくる方もいらっしゃるんですよ。

年齢層も幅広く、下は6歳から上は80代まで。特に子どもと70代の受講生が中心ですが、最近では女性やシニア世代の受講生も増えているんですよ。

一方で、働き盛りの世代が少し少ない印象です。今どきは、スマホのアプリなどで手軽に「将棋」を楽しまれているのかもしれないね。

幅広い年齢層の方が通われているとのことですが、年齢や経験の差がある中で、指導の難しさを感じることはありますか？

特に難しいと感じることはありませんが、やはり年齢や学年によって“棋力[※6]”は違うので、一律の指導ではなく、それぞれの“棋力”に配慮して指導しています。

[※6]“棋力”とは、将棋や囲碁などの盤上ゲームにおける「強さ」や「腕前」を指す言葉で、段級位以外にも対局内容の質によって客観的に測ることができます。

成人指導において、大切にされていることは？

大人には、この先も永く“趣味”として親しんでいただきたいので、楽しみながら「将棋」を身につけていただくという点を一番大切にしています。

やはり大人でも、負け続けてばかりでは嫌になってしまいますよね。

ですから、私が直接指導する際には、気づかれないように上手く調整して、時には1手違いくらいでわざと負けたりするんですよ(笑)

そうやって「勝つ喜び」や「対局の楽しさ」を実感してもらい、やる気につながっていただけるような教え方を心がけています。

子どもたちの指導において、大切にされていることは？

子どもたちにも大人と同じように純粋に「将棋」を楽しんでもらうことを一番に心掛けて指導していますが、それと同時に「将棋」を通じて礼儀作法や思いやりの心など、精神的なことも学んでもらいたいと考えています。

そこで子どもたちには、「おねがいします!」から始めて、最後に「ありがとうございます!」で終わることや、勝敗だけにとらわれないことを大切にしようと声をかけ、“棋力”だけでなく、“心”

も共に成長してもらえような指導を心掛けています。

実は、「将棋」の各局面は、子どもの能力を引き出す絶好の機会になっているんですよ。

序盤では、駒の損得を考えることから“思考力”が育ちます。

中盤では、駒の損得だけでなく、駒の働きや相手の駒の連絡を予測するので、そこから“想像力”がつかます。また盤面全体を見ることで“判断力”が自然と磨かれていきます。

そして終盤では、相手より一手先に勝負をしかける“思い切りの良さ”や“勇敢さ”も培われるんですよ。

先生が講師としての「やりがい」を感じるのは、どんな時ですか？

子どもたちが「将棋」を楽しみ、継続してくれている姿を見る時です。

この夏、『わくわく子ども教室』を5回開催するのですが、延べ68名もの小学生が申し込んでくれており、その多くはリピーターです。例えば今日の参加者は15名ですが、このうち13名が以前も来てくれた子どもたちなんですよ。

小学生も高学年にもなると、サッカーなどのクラブ活動や他の習い事でみな忙しくなります。それでも「前回楽しかったから。」と毎年のように顔を見せてくれる姿には、胸が熱くなりますね。

そして中学生や高校生になったら受験勉強もあり、部活動だけでなく学習塾にも通わなくてはならなくて、更に忙しくなるでしょう？そんな忙しい合間をぬって、教室へ足を運んでくれる子もいるんです。

そんな姿を見守れることこそが、私にとって何よりのやりがいであり、講師を続けていて良かったと感じる瞬間です。

どのような方が講師に向いていると思われますか？

うーん、“講師の向き・不向き”については、考えたことはないのですが…。

[そう口にしながらも、真剣に考えてくださる小澤先生。]

意外に思われるかもしれませんが、「将棋」がすごく強いからといって、上手く教えられるものでもないんですよ。どちらかという、「将棋」を知った上で人に教えることが得意な方、人に教えることが好きな方が上手く教えていらっしゃる気がします。

自身の経験を振り返ってみると、定年後に「人手不足だから助けてくれないか。」と頼まれて非常勤講師を1年引き受けたり、また若い頃には家庭教師をしたり、ボーイスカウトの隊長や事務局長をやったりもしていたな、と。

今回の質問で、もともと人に教えることが好きな性格だったから「将棋」を教えるようになっ

たんだなと気づきました。

そして、それは他の教室でも同じように言えるんじゃないかなど。

特定分野の知識やスキルが人よりもすぐ秀でている必要はなくて、「人に教えることが好き」という気持ちがある人が、講師に向いているのではないかと思います。

これから講師として一歩踏み出そうと検討している方へ、アドバイスをお願いします。

「教える自分自身も楽しく、来てくれる人たちも楽しめる講座にすること」が何よりも大切だと思います。

そしてもう一つアドバイスをするなら、『継続してもらうための工夫』として、「敢えて完全無料にはせず、少額でも対価をいただくこと」をお勧めします。

私も当初は無料指導を検討していたところ、「人間は完全に無料だと、かえって学ぼうとする気がなくなってしまう傾向がある【※7】」と聞き、考えを改めたんです。

現在は活動の目的に合わせて受講料を分け、『わくわく子ども教室(将棋教室)』は子どもたちに体験格差が生じさせないことを目的とした取り組みなので無料にし、定期的な学びの場である『学びのとびら(将棋教室)』では1回200円、そしてより高い学びを提供する『個人指導教室』では1回500円をいただいて指導しています。

【※7】人は無料講座の場合、支払ったコストがないことから損失回避バイアス(損失を避ける行動を優先する心理的傾向)が働かず、途中でやめても「損をした」という感覚が薄くなり、継続意欲が低下しやすい心理に陥ることがあります。

「将棋」を“趣味”として始めようかと悩んでいる方へ、「将棋」の魅力を教えてください。

「将棋」は楽しい遊びです。

なかでも、部分的に“必至^{ひっし}”な状態から逃れ、逆転の活路を見出す“必至逃れの必至”なんでものもあって、この辺までいくとスリルがあって面白いですよ。【※5】

また「将棋」では盤面全体を見て先を読むために「思考力」や「記憶力」、そして「集中力」を使ってプレーすることから、プレー中は常に脳が活性化され、認知症予防にもなります。

シニアの方には是非、将棋を“趣味の1つ”に加えていただけたらと思います。

【※5】「必至逃れの必至」とは、相手から必至(次に詰まされてしまう状態)をかけられた状況において、こちらも相手の玉を必至に追い込む手を指し、相手の必至を受けなし(防ぐことができない状況)にしてしまう非常に高度な攻防の局面のことです。

先生が考える「将棋が強くなるコツ」とは何でしょうか？

日常的に「将棋」に親しむとことが、上達への一番の近道ではないかと思います。

これまで教えてきた子どもたちの中には、県代表として全国大会でベスト4 やベスト8 に進んだ子や、今度10月2日に愛知県で開催される将棋日本シリーズ東海大会に出場予定の子もいます。

また私の『個人指導教室』には地元の川辺町だけでなく、岐阜市や名古屋市等の遠方から熱心に通ってくる生徒も多く、小学校3年生から高校受験期まで関市から通い続けてくれた子や毎週岐阜市から親と一緒に通っていた高校生は、県トップレベルにまでなりました。

そんな強くなった子どもたちを振り返ると、ある共通点に気づきます。

それは、「おじいさんや親御さんも将棋に熱心で、ご家族みんなで将棋を楽しんでいる」という点です。

「日常の中に将棋がある」という環境が“強さ”につながっているわけですね。

最後に、新しいことに挑戦したいと思いつつも、なかなか一歩を踏み出せない方へのアドバイスもいただけますか？

一滴の水でも絶えず同じ場所へ落とし続ければ、固い石に穴を開けることができるって故事[※8]はすごく有名ですし、「底抜け桶の難題婿」という日本昔話[※9]もありますよね。

豆の皿移動競技でも一気に何個かつまもうとするより、1粒ずつとった方が案外早いですし、「山の上に登るのも一歩進んでみたら…」という内容の曲もありませんでしたっけ？

世の中にこのような言葉が多いことから、「わずかでも根気よく積み重ねれば、やがて大きな目標を達成できる」という教訓がいかに大事なのかが分かりますよね。

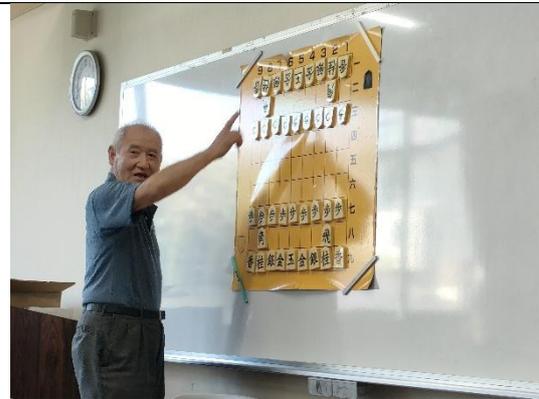
新たな一歩をなかなか踏み出せない時こそ、「少しずつやるのが大事だ。」ということを出して、取り組んでいただけるとよいのではないかと思います。

[※8]「水滴石穿^{すいてきせきせん}」とは、小さな努力を積み重ねることで、大きな事柄を成し遂げられるという意味の故事成語です。(中国の歴史書『漢書 枚乘伝』に記された「泰山の雨の霤^{いたいざん}は石を穿つ^{うが}」という言葉に由来しています。)

[※9]「底抜け桶の難題婿」は、困難に直面した際の忍耐強さや誠実さを教訓とした日本昔話です。

『昔むかし、ある名主が婿候補たちに「底の抜けた桶で井戸から一番多く水を汲んだ者に娘をやる」という難題を出した。諦める者が続出する中で、ただ一人、一晩中休まずにつるべの桶の淵や縄についた僅かなしずくを忍耐強く集めた若者がいた。名主はその若者の忍耐強さと勤勉さを認めて娘婿とし、全財産を譲ったとき。』

『わくわく子ども教室(将棋教室)』の様子



1. 『わくわく教室(将棋教室)』は2時間。
開始から30分間は、大盤を用いて全体指導を行います。



2. 先生は子どもたちにいくつかの質問をすることでレベルを把握し、全体指導で話す内容を臨機応変に見定めます。



3. 全体指導の後は、お楽しみの対局タイムです。



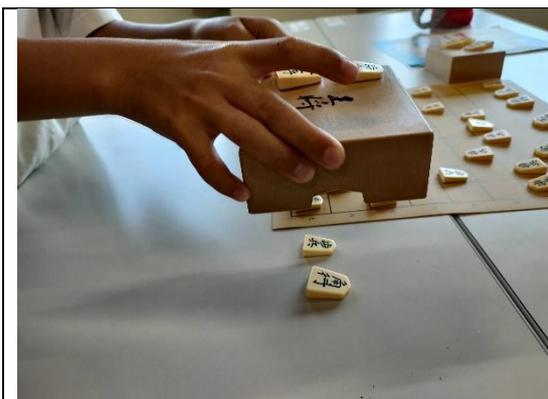
4. 対局相手がいない子には、詰め将棋を出題したり、対局相手になったりします。



5. (4の子が長考している間に) 教室内をまわりながら、将棋のマナーに関する指導を行います。



6. 駒台を左側に置いている子に、「左利きでも駒台は右側に置こうね。」と優しく声をかけます。



7. 「カクだけに角を隠す」とおどけ、何度注意を受けても、取った角を駒台（箱）の下に隠す子がいました。



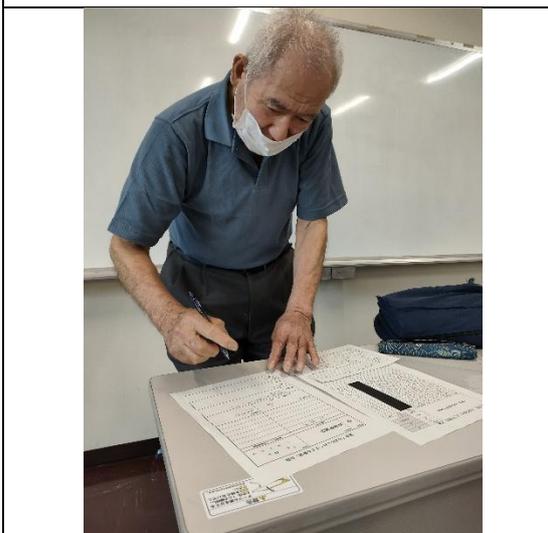
8. 「持ち駒は駒台に置いて、相手に見えるように置くのがマナーだよ。」と先生は怒ることなく、見回りの度に根気よく諭します。



9. 終局後の感想戦には先生も加わり、アドバイスをを行います。



10. 感想戦は、敗者にとっても勝者にとっても勉強になり、棋力向上と意欲向上につながります。



11. 講座終了後、元気に挨拶して帰っていく子どもたちを見送り、机や椅子の片づけ、窓の施錠を行います。（※）

その後、「講座実施報告書」を記入し、川辺町教育委員会 生涯学習課に提出します。

（※）一般的な『講師登録事業による市民自主講座』では、教室の鍵の開閉から、準備、後片付けまでの運営全般は講師と生徒で行います。

《掲載写真について》

教室に参加した子どもたちの親御さんより、写真の掲載許可を受けています。

『わくわく子ども教室(将棋教室)』の参加者の声

4年生男子

今日は2回目の参加。

前回友達と一緒に参加して楽しかったからまた来た。

5年生男子

去年も参加して楽しかったし、先生の説明が分かりやすかったから今年も申込んだ。

4年生女子

ここには1年生の時から通っています。

お兄ちゃんが将棋をやっていたから、私は小学校に入る前から将棋をやっていたの。

だけど、1年生にならないと教室には通えへんくって…あん時は「お兄ちゃんと一緒に通いたいのに」って思いました。

今日、お兄ちゃんはサッカーがあって来ていないけど、サッカーがない日は一緒に来れます。

4年生女子(姉)、2年生男子(弟)

弟:去年からずっと参加してる。去年は、夏も春も来たよ。

姉:私も。

先生わかりやすいし、家だと弟やパパとしか(将棋を)やれないけど、ここに来たら違う人ともやれるから楽しいもん。

弟:僕はまだ(教室でも)お姉ちゃんとか(対局するのは)ムリだけど、先生に教えてもらえるから上手になれるんじゃないかな~って思う。

『講師登録制度』（川辺町）

川辺町には、下記2種類の『講師登録制度』があります。

	事業名	生涯学習講座	これまでに開講された講座例
①	公民館講座講師	<ul style="list-style-type: none"> ・『学びのとびら』 ・前期・後期の2期制（川辺町は前期のみ） ・みのかも定住自立圏にお住まいの子どもから成人が対象（※） ・趣味、教養、芸術（創作）、音楽、健康、スポーツなど様々な分野の生涯学習講座を格安で開講 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆ペン教室 ・日本史教室 ・脳トレ教室 ・ヨガ教室 ・二胡教室 ・ウクレレ教室 ・ピアノ教室 ・麻雀教室 ・パッチワーク教室 ・バランスボール教室 ・洋菓子作り教室 ・クラフト教室 ・フラワーアレンジメント教室 ・将棋教室 など
②	まちな先生登録制度（子どもたちに体験格差が生じさせない取り組み）	<ul style="list-style-type: none"> ・『わくわく子ども教室』 ・7月、8月と1月～3月の2期制 ・町内小学生が対象 ・自然体験から文化的体験まで幅広い分野の講座やプログラムを無料で開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・お茶教室 ・和太鼓教室 ・おやつ作り教室 ・昔遊び教室 ・将棋教室 ・工作教室 ・着付け教室 ・クワガタ・カブトムシ教室 ・パステルアート教室 ・アロマセラピー教室 ・バルシューレ教室（ドイツ発祥のボールを使った運動プログラム）など

（※）美濃加茂市、坂祝町、川辺町、富加町、七宗町、八百津町、白川町、東白川村は、「みのかも定住自立圏」という1つの枠組みで5つの重点分野に取り組んでおり、『生涯学習』はその重点分野の1つ。

8市町村の住民は、相互の『生涯学習講座』に参加可能となっています。

『講師登録』に興味がある方へ

自治体によって講師登録の方法や条件、活動期間、謝金の有無等の詳細は異なるため、「ぎふ、NPO・生涯学習プラザ（県民講師登録）」または、「お住まい市町村教育委員会の生涯学習係（市町村民講師登録）」に詳細をお問合せください。